



館長だより

山形県産業科学館

令和8年1月7日(水)

発行 館長 加藤智一

丙午の迷信はどこから来たのか —歴史の中で形づくられた「火」と「女性」の物語—

日本社会には、時折、理屈では説明できないほど強い影響力を持つ迷信が存在します。その一つが「丙午（ひのえうま）生まれの女性は気性が激しく、夫の命を縮める」という俗信です。科学的根拠は一切ないにもかかわらず、この言説は江戸から昭和に至るまで社会の意思決定を左右し、1966年には出生数が前年比25%も減少するという異例の人口動態を生み出しました。では、この迷信はいつ、どのように、何を根拠に広まっていったのでしょうか。その起源として考えられるのが、陰陽五行思想と「火」の重なりです。丙午は十干の「丙」と十二支の「午」が重なる年で、60年に一度巡ってきます。丙も午も陰陽五行説では「火」の属性を持つため、古くから「火気が強まる年」と解釈されてきました。平安期にはすでに「火難の年」とする記録が見られ、これが後の迷信の下地となつたと考えられます。しかし、この段階ではまだ「女性」への偏見とは結びついていません。火の災いを恐れる素朴な信仰が、後世の物語や社会構造と結びつくことで、特定の属性を持つ人々への差別へと変質していくのです。

例えば江戸時代、丙午迷信が決定的に広まったある出来事がありました。それは1682年の天和の大火を背景にした「八百屋お七」の物語が、浄瑠璃や読本、歌舞伎などを通じて爆発的に流布したことです。お七は恋しい寺小姓に会いたい一心で自宅に火を放ち、火刑に処された少女として知られます。実際の史料ではお七が丙午生まれであったかは不明ですが、紀海音や井原西鶴らが創作の中で「丙午生まれの情念の強い娘」と描いたことで、物語上の設定が現実の一般認識へと転化してしまいました。ここで重要なのは、江戸社会が「女性の情念」や「家を焼く」というイメージを結びつけやすい文化的土壤を持っていた点です。封建的な家父長制のもと、女性の主体性や強い感情はしばしば「家を乱すもの」として警戒されました。お七の物語は、こうした社会心理に見事に合致し、丙午の女性像を「危険で、家を焼き尽くす存在」として象徴化したと考えられます。また明治期に入ると、戸籍制度の整備により出生年が明確に記録されるようになりました。すると丙午の迷信は、より具体的な社会的影響を持ち始めることになります。1906年の丙午では出生数が約4%減少

し、新聞には「丙午の娘の将来を案じる親」の声が掲載されました。1920年代には、1906年生まれの女性が結婚適齢期を迎え、縁談の破談や婚期の遅れが相次いだと言います。中には迷信を苦にした自殺者まで出るなど、迷信が個人の人生を左右する深刻な社会問題となつたようです。そして昭和41年（1966）、この年の出生数は136万人と、前年より約25%も減少しました。これは戦後日本の人口統計において突出した異常値であり、迷信が国家規模の人口動態を左右した稀有な例といえます。その背景には、「子どもが将来結婚で差別されないように」という親の配慮や、世間体を気にする地域社会の圧力、そして当時の経済不安（昭和40年不況）などが重なったことが指摘されています。

以上の歴史的経過を踏まえると、丙午迷信が広まった理由は次の三点に整理できます。一つは物語の力です。八百屋お七の悲恋物語は、火災・情念・女性というモチーフが強烈で、人々の記憶に残りやすかったと言えます。創作が現実を上書きし、迷信を「物語として信じる」形で広まってしまいました。そして、当時の社会構造にも原因があります。封建的な家父長制のもと、女性の主体性や強さは、脅威とみなされやすかったのではないでしょうか。迷信は女性を抑制する装置として機能し、社会的に利用された側面があります。そしてもう一つが、集団心理です。「他人が信じているから自分も従う」という同調圧力が、迷信を強化しました。1966年の出生数激減は、その典型例と言えるでしょう。

丙午の迷信は、火の象徴性、物語の力、社会構造、そして集団心理が複雑に絡み合って形成された文化現象です。根拠は科学ではなく、人々の恐れや価値観、そして「他者のまなざし」だったのです。現代でも、だれかがふと口にした不吉な一言が、その時は全く理解できない事であったとしても、むしろだからこそ、とりあえずこの事には距離を置いておこうと考えてしまいがちです。この小さな行動が、もし、何千、何万の行動として現実に行われたら、もはや他人事では済まされない現象となって現れる訳です。現代は、根拠のないフェイク映像や画像が簡単に作れてしまう時代です。インターネット、SNSを通してあつと言う間に拡散してしまいます。こんな時代を生き抜く私たちには、真偽を見抜く科学的洞察力と、強い信念が求められているのです。